

男になる少年たち

Bragi Skúlason

私が男であると感じたのはいつだろうか
それは私が生まれたときだろうか
自分が男の身体をしていることに気づいたのはいつだろうか
男の子が泣かないことに気づいたのはいつだろうか
友情に気づいたのはいつだろうか
愛に気づいたのはいつだろうか
結婚をしたのはいつだろうか
父親になったのはいつだろうか
男になった瞬間とはいつだろうか
私は本物の男なのだろうか
今私は本当の男になっているのだろうか
それとも死ぬときに本物の男になるのだろうか

いくつかの発展途上国と呼ばれる国々において、男の子は成年男子に仲間入りするために加入儀礼を受ける。このことは、男の子たちが母親の保護から大人の男社会へと移行していくことを男の子たちに印象づける。現在西欧社会において男性の加入儀礼について語られることはほとんどない。何歳でその加入儀礼を受けるべきかを判断することは難しい。実際のところ、男の子たちが特定の年齢において加入儀礼をすべきかどうかさえ問題になるだろう。一つのことは明らかである。それは、少年の中には永遠に少年のままでいる者がいるということである。少年のままの彼らは、成人男性としての責任を負わない。また彼らの人生には、男性になるための手引きが欠落しているようである。

今世紀、大きな変化が社会に起こった。第二次世界大戦以前と比較すると、今や日常生活はまったく異なっており、かつて持っていた価値が絶えず見直されている。性別役割分業に関する認識がより多様なものとなっている。

幼児期から 10 代へ、10 代から成人男性としての人生へという変化は、我々男性にとって複雑であり、かつてそれらの変化が社会の一致した見解として承認されていたようには明確に定義されていない。10 代という時期は、訓練とその後増大される公の責務を通じ

て、成人期のための準備に影響を与える時期であるので、特に通過するのが難しい。

このことに加えて、身体は急激に変化する。しかしながら、社会の劇的な変化のために、十代のうちに将来の職業に向けて準備できるという保証はないので、10代だということは非常に不安定だということを意味する。失業は考慮されなければならない事実である。一生の間に、より一層の教育と訓練が、おそらく数回にわたって必要とされる。

その上、多くの若者は、夫や父親としての責任を早々に負わなければならないが、その反面、離婚するとまた一からやり直さなければならないのである。

本物の男になることは究極のことであり、すなわちアイデンティティを確立することである。『熱意 (Fire In the Belly)』という著書の中で Sam Keen は、男性が自分自身に問いたたす必要のある二つの基本的問題について述べている。すなわち、第一は自分の人生をどちらに導くかということであり、第二は、誰が自分についてくるかということである。

男の子たちは「男らしい」スポーツマンに、「男らしい」ポップス界のミュージシャンに、「男らしい」映画スターに、アイドルを見いだす。これらすべてのアイドルが持つ問題は、それらのほとんどが男の子たちの日常生活からかけ離れていることにある。これらのアイドルとの接触は、マスメディアやファンタジーを通じて行われる。大人の男性がしなければならないことは、若い男性の発達に対し、建設的な方向に影響を与えることである。

バイキング時代において、大人の男たちは、兄弟の誓いを交わし、誓いを交わした兄弟に何か危害を加えるものに対する復讐を約束した。問題は、今日においてもそのような兄弟の誓いが我々男性の間に存在しているかどうかということである。男の友情は、神聖なものなのであろうか。私は兄弟の面倒を見るべきなのだろうか。男たちの中には、血の儀式を通じて結びついている少年たちのように、「兄弟の誓い」を交わした者もいる。痛みを体験すること、そうしたことができるグループの存在を示すことは重要なことである。そして私たちに欠けている「しきたり」はまさにこういうものなのである。

友情のもう一つの側面は、もちろん対立する相手を持つことである。彼らは自分が望まない姿を教えてくれるので、対立相手を持つことは重要なことである。共通の敵を持つことほど、結束を強めることはない。また、敵を得ることはかなり簡単なことである。自分の存在を認識させるようにするために、あなた方は肯定的あるいは否定的な意見のどちらかを選択しなければならない。

男性の性役割に関して、男らしさのその大部分が明確になっている。これらは男性がすることや彼らの職業と、かなり密接な関係がある。家父長制の下で男性の地位を規定するのに支配的となっていた役割は、家長の役割である。私はたずねる。今日のスカンジナビアでは、男性が家長なのかと。

若い男性たちは、年長者の導きなしに、集団内で自己の居場所を見いだすことが期待されているのだろうか。一番いい方法は、大人が若者を受け入れようと心がけ、大人の世界に若者を導き入れようとするところである。私は、ある時点で、若者が少年でいることをやめて、その代わりに必然的に負わされるすべての責任をもった大人になるということを学び、これを通して若者が他の大人たちとともに経験を積むことがいかに重要であるかについて強調したい。

大人の男になることはすばらしい

男になるということ

すばらしい贈り物!

一人の男として生きていくこと

愛すること 捧げること 慕うこと

祈ること 疑うこと 一人の男としてこの世界を理解すること

息子、少年、夫、父親、おじいさん、本物の男になること

嘆くこと 失うこと 痛みを感じることに

男として苦難を乗り越えること

男とは何かという問は男のいない世界では存続しない

男になるということはすばらしいことだ

それは生を受け、生を大切にすることだ

(渋谷美穂)